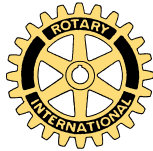


THE ROTARY CLUB OF KARIYA



Weekly



創立 1954年3月8日
承認 1954年3月30日

例会日時 毎週月曜日
12:30 ~ 13:30
例会場 刈谷市新栄町3の26
刈谷商工会議所内
事務所 TEL <0566>22-2111
FAX <0566>25-2111
メール kariyar@katch.ne.jp
ホームページ http://www.kariya-rotary.com
会長 杉浦 芳一
幹事 伊藤 節夫
会報委員長 關 淳之

2014 ~ 2015年度 国際ロータリー ゲイリー C.K. ホァン 会長テーマ

Light Up Rotary ロータリーに輝きを

この会報は、地球環境保全に考慮し再生紙を使用しています。

第2877回例会プログラム

[当年度=28回目; 当月=2週目]

2015年(平成27年) 3月9日(月)

創立記念例会

1. 例会……………〈司会:プログラム委員会〉

- 12:28 1. チャイム
12:30 2. 点鐘……〈会長〉
3. 開会宣言
4. ロータリーソング斉唱……我等の生業
5. 講師・ゲスト並びにビジター紹介
6. 食事
- 12:45 7. 会長挨拶並びに会長報告
8. 坂茂会員へ感謝状贈呈
9. 幹事報告
10. 出席報告
11. 委員会報告
12. ニコニコボックス報告
13. 次週並びに次々週のプログラムの予告
(3/16) ……休会
(クラブ定款第6条第1節(c))
(3/23) ……
クラブフォーラム(職業奉仕委員会)
※職業表彰
講師 技能五輪全国大会金賞
池上惣一郎様
〃 小山 巧様
アビリンピック全国大会金賞
奥村 優様
(紹介者 加藤 哲也 会員)
- 13:00 14. 本日のプログラム
卓話 「170年の伝統に生きる“創造”と
“継承”」
講師 西川流家元 西川 ^{かずまき}千雅 様
(紹介者 杉浦世志朗 会員)

15. 謝辞
16. 点鐘……〈会長〉
17. 閉会宣言

13:30 18. 散会

出席

会員総数 94名 出席免除 23名
出席義務者+免除者の内例会出席者 89名
欠席 14名 出席率 84.27%
前々回(2/23)の修正出席率 100%

幹事報告

- 1) 3月23日の理事会は、18時よりクインチで行います。詳しくは後日メール、FAX等でご案内致します。
2) 本日、NPO法人パンドラのクッキーをお買い上げ頂きありがとうございました。

会長あいさつ

杉浦 芳一



今日は刈谷ロータリークラブ創立記念例会ですので設立当時のお話をしたいと思います。

わが刈谷ロータリークラブは1954年(昭和29年)3月8日に創立されR.I加盟認証が3月30日。(日本で118番目のロータリー) 認証状伝達式が10月23日に行われ、チャーターメンバーは24人でスタートしました。初代会長に石田退三さん、幹事に林虎雄さんが就任されスポンサークラブは名古屋ロータリークラブです。

ちなみに名古屋ロータリークラブは1925年(大正14年)2月7日に東京ロータリークラブをスポンサーに日本で3番目にできたロータリークラブです。

去る2月3日に私は名古屋ロータリークラブ創立90周年式典に来賓としてお招き頂きました。その歴史と伝統と名古屋ロータリアンの皆様に敬意と感銘を致しました。

刈谷も61周年を迎えたわけですが90年の伝統と格式・風格はたいへんなものであると感じました。

刈谷ロータリークラブは90周年・100周年にはどうなっているでしょう？

刈谷ロータリークラブから1959年（昭和34年）に碧南RC、1969年（昭和44年）に高浜RC、1991年（平成3年）に知立RCを生んでおります。

24名でスタートした刈谷ロータリークラブは現在94名、碧南67名、高浜34名、知立61名総勢256名のロータリアンがこの地域でご活躍されております。

刈谷ロータリークラブの名に恥じないよう、残り少なくなりましたがもうひとふんばりしたいと思っております。

坂 茂会員へ感謝状贈呈



卓 話

「170年の伝統に生きる“創造”と“継承”」

西川流家元

西川 千雅 様



本日、お話をさせていただきます。日本舞踊西川流の家元をやらせて頂いている西川千雅（かずまさ）ともうします。日本舞踊というと敷居が高く思われるかもしれませんが、実際にそれほどステイタスの高いものではありません。

我々の「日本舞踊」、という言葉は明治のはじめに生まれたもので、名古屋出身の文学博士・坪内逍遙が考えたものです。そのもととは関東では「おどり」関西では「舞」と呼ばれました。そしてルーツは「歌舞伎」です。カブキはむかし「傾き」とかかれ「傾奇者」、つまり織田信長や前田利家などと同じで「派手だ」「変わっている」という意味があります。

戦国時代の終わりに「出雲の阿国」という女性が京の四条の河原で踊り、それが大ブームになったのです。男性の格好をして、女性が踊る姿を「かぶきおどり」と呼んだわけです。その芸を遊女達が真似をしたので禁止され、今のように男性だけの歌舞伎になりました。

名古屋の西川流は、天保12年に江戸から流れた舞踊家

の西川仁蔵、のちの西川鯉三郎がはじめたものです。いわゆる幕末期で、江戸時代が終わり明治になると、文明開化とともに歌舞伎や能など古くからの芸能が危機を迎えます。

歌舞伎では当初洋服を着てやったりしたのですが流行らず、次第に上流階級にむけた高尚な芸術をめざし、能や狂言から取材するようになります。名古屋でもおなじで、初代家元の鯉三郎に教えてお家が断絶になった能楽師も居ました。初代が亡くなると西川流は40年ほど家元不在になります。そして昭和10年もすぎると、理事会で迎えた歌舞伎俳優を家元にしよう、となります。これが二代目西川鯉三郎です。

二代目は、名人・六代目尾上菊五郎の内弟子でした。ほぼ孤児で、家柄もなく、修業に明け暮れた幼少期ののち、大抜擢されて役をもらいました。その師匠の推挙もあり、名古屋に婿入りしたわけです。

折しも第二次世界大戦になり、戦争中慰問隊を結成した鯉三郎は終戦後ひとつの興行を名古屋ではじめます。それが「名古屋をどり」です。若いころ師匠の元を飛び出して浅草で芝居に出ていたとき高尚な歌舞伎の芸が通用しなかった経験を生かして、慰問で各基地を回った時は軍歌で踊ったりしました。

「名古屋をどり」はその経験を活かした「顧客中心」の興行にしよう、と面白さを主体にしました。「舞踊劇」というものはじめ、現代の作家を起用しました。そこに書いたのは川端康成、木下順二、三島由紀夫、有吉佐和子などなど何十人にもなり、「ちゃんちき」など、そのまま世界的なオペラになった作品もあります。

その息子である西川右近が三世家元を継承して、さらにその傾向は強くなり、10年ほど前に日本舞踊とフィットネスを合体させた「ノス」(NOSS Nihon Odori Sports Science) を発表しました。これは中京大学スポーツ科学部・湯浅景元教授とつくり、全国にインストラクターが出来ました。そのなかには舞踊家ではなく、理学療法士やインストラクター、医者まで居ます。スポーツクラブや医療の現場でも使われだしました。

現代社会で伝統産業は危機にひんしています。現代の時流に合わせないと滅びてしまいます。西川流の言葉に「創造なくして伝承なし、伝承なくして創造なし」という言葉があります。自分の代になっても、その言葉を継承したいと思っております。